

「津村喬によって語られた天人合一としての環境気功——日本気功の一展開」

鳥飼美和子

(一般社団法人 峨眉養生文化研修院理事)

「身体性の政治」としての「東洋体育」

日本において 1970 年代末、80 年代初頭から普及された気功の運動を牽引したのは 1960 年代末に全共闘の活動家であった津村喬と星野稔であり、特に津村は全共闘運動の思想的なキーパーソンの一人であった。全共闘運動による社会改革の限界を経験した津村が、1978 年から掲げたテーマは政治概念そのものを変更する「身体性の政治」(津村 1978) である。

それは「権力によってからめとられないもの」「置き換えのきかない身体性の領域に根差したもの」「身体性の発見」「既存の秩序によってからだを定義するのではなく、からだの全体性によって秩序のニセの普遍性を相対化すること」(津村 2016:215) であるという。津村は「からだを解き放っていくことは、それだけではありえない。…(中略)…自らの文化を生み出そうとする、各地の住民運動、労働運動、と結びあうことができるし、結び合わねばならない」(津村・岡島 1979:6) として、身体性を発見することによって新しい社会活動が生まれるはずだと考えた。この時の津村は「身体性の政治」の具体的な方法を「東洋体育」と名づけた。それは星野稔や岡島瑞徳らと共に行った太極拳や野口整体、ヨガなどの東洋にルーツをもつ身体思想によって生まれる文化であり、新しい形の社会運動であり、身体性の政治の実践であるとした。1980 年前後に津村と星野は中国でブームとなっていた気功を知り、日本における気功普及を担うこととなる。中国語が堪能であった星野が実践面をの担い、津村は思想面での牽引者となった。彼らの活動は「東洋体育」という名から「深層体育」=「気功」へとシフトチェンジされていった。それは「体(育)」から「気(功)」へ、言い換えれば、具体的身体活動から抽象的な気の運動や意識、精神へのシフトチェンジともいえよう。

「東洋体育」から「深層体育」=「気功」へ

そのシフトチェンジには、1980 年頃からの社会情勢が背景にあった。宗教学・比較宗教学の前川理子は、津村喬の全共闘運動から 1970 年代の東洋体育運動、のちの気功普及運動を「ニューエイジ類似運動」(前川 1998) と名づけた。前川は津村の活動を「世俗の運動が宗教化していく」(前川 1998:98) 事例として取り上げた。それはカウンターカルチャー、精神世界の出現と同時代的な、社会運動の精神主義化である。津村の運動=「ニューエイジ類似運動は「自己と社会の同時変革」を基本要件とし、しかも両者の距離が次第に無化していく(「超越即内在」にむかう)契機をはらんだ運動」(前川 1998:92) としている。

また宗教学者の島蘭進の『精神世界のゆくえ』(島蘭 1996=2022) では、気(気功)についての記載が 11 箇所もある。なぜ気功が精神世界とコミットしたのか、それは以下の一節が端的に表している。

気功の教室に通ってくる人を思い浮かべてみよう。そうした人の中には、身体の不調に困ったからとか、健康を維持したいからというように、気功をもつばら実際的な実用的な領域に属するものと考えている人も多い。しかし「気」が宇宙と身体を貫くエネルギーである限り、気功は宇宙論的形而上学的な次元をも含んでいる。気功は単なる健康法に留まることなく、精神世界的な次元を含みこんでいるのがふつうである。(島蘭 2022:34)

気功が「精神世界的な次元を含みこんでいるのがふつうである」と認識されるようになるのは、身体
健康という具体的な次元に加えて、「気」が宇宙と身体を貫くエネルギーであるという認識があるから
である。しかし、中医師・劉貴珍が各種の養生法を気功と名づけた 1956 年時点では身体内の正気という中
医学的な気、人間生命力としての気が問題にされているのである。それが『「気」が宇宙と身体を貫くエ
ネルギー』であり「気功は単なる健康法に留まることなく、精神世界的な次元を含みこんでいるのがふつ
う」という認識に変容するには、いくつかの条件が重なっている。それは、前提としてカウンターカルチ
ャーからニューエイジへという欧米の潮流の世界的広がり、中国の文化大革命終了後の気功ブームによ
って養生気功を逸脱したものが一気に現れたこと、日本の精神世界というジャンルの登場、さらに湯淺
泰雄らの気功研究も学問的に身体と意識の架橋を探求し、精神世界的な理解に影響を与えたと考えられ
る。

天人合一としての気功的生活、環境気功

前川が指摘するように津村らの運動は「精神主義」的社会運動であり、かつ「ニューエイジ類似運動」
であるように見える。しかし、津村の牽引した東洋体育から気功へのムーブメントは、「超越的内在」へ
向かう方向だけではなく、天人相応、天人合一の思想を人間と環境の関係と捉えて「環境気功」という概
念を提出するに至った。

津村は、1993 年春に NHK の教育 TV「気功専科 II」全 12 回の講師として登場した。これはガン患者
が自ら気功をすることを治療の一部として採用した医師・帯津良一 の後を継いで登場であった。その
前後が、気功が最も一般社会に認知された時期だと思われる。視聴率が 1%でも百万人が視聴するという
テレビ、それも教育テレビなら信頼性もあると受け取られる番組への登場に際して、津村は一般市民が
理解しやすい表現に和らげて、自分が気功に託す考え方を盛り込んでいった。テキストには、歴史や中
医学関連など気功紹介としてはオーソドックスな部分のほかに、いくつかのトピックが用意されていた。

「樹林気功と異種間コミュニケーション」「イルカと話す・イルカになる」「清里エコロジーキャンプでの
環境気功」「アイヌの信仰と先住民の気の文化」「動物模倣の系譜」などである。1970 年代から考えて
いた環境問題や差別や資本主義社会がもたらした自己疎外の問題を超えるために、ディープエコロジーや
アニミズム、シャーマニズム、意識の拡張や深化を提案している。ここに津村はかつてから目指していた
社会の変革と文化革命イメージを示したといえよう。

また、気功は意識の進化や超越の方向だけでなく、気功によるリラクセスを深めて日常のストレスから
解放された「気功的生活」を提案している。緊張した行動、身振りから脱し、心の過剰反応を制御し、心
の状態を自由にして、変化させ自己一致、自己の内なる調停をはかるとするのは、古典が語る「恬淡虚無」
に通じることになり、個人的のエゴを超えて、他者の痛みを理解する利他心をも生み出す。日常と非日常
の境目がなくなっていくことになる。これが進めば天人合一の境地と繋がることになるというのが津村
の天人合一であり、それを生み出す方法が気功という「深層体育」だと語っている。(津村 1993b)。こ
こで語られた「深層体育」とは、人間の身体と意識の表層と深層、生命の全体性、あるいは人類の文化の
深層から発現する体育だ、という。深層体育によって天人合一の境地にいたる、とする。気功によるリ
ラクセスを深めてストレスから解放された「気功的生活」という日常と、日常と非日常の境目がなくな
って天人合一することが同時に語られている。このふたつの在り方をひとつながりに結ぶのが、「環境気功」

というコンセプトである。

自分の生活のひとコマひとコマが全宇宙とつながりあって存在しているという事実に目を向けることなしに、人類は文明の暴走を食い止めることができないであろう。医学の問題、心の問題、環境の問題は、実はひとつのことである。そしてこれに具体的、実践的に対応できるのが気功なのである。…環境と人体の同一性という問題は、遠く『易経』のなかで天人合一の問題として提案され、中国の伝統哲学の中で一貫して探求されてきた。また、中国の伝統的な「気の地理学」であり環境科学である風水理論の中で研究されてきた。功法のなかでも、五禽戯に典型的に見られるように「人間以外のものを演じて人間のあり方を省察する」というのは気功の最も得意とする方法である。(津村 1993b:219-220)

津村は 1990 年代から道教研究家で実践家でもあった四川省社会科学院哲学研究所長の李遠国とともに四川省の環境改善のプロジェクトを立ち上げた。李遠国は中国哲学の研究者として稀有な存在であり、正式な大学教育を受けず、独学で学び、国家レベルの四川省社会科学院哲学研究所の所長となった人物である。彼の研究は文献研究と共に、身をもって道教の修練法を行うというものであった。修練法による身心変容によって自身の身心が外なる環境といかに同調するかを体験した李遠国にとって環境気功は理念だけでなく、実体験を伴ったものであったという。(李 2002) .しかし、中国においてこの活動が広まることは無かった。

このように、気功が実践的な環境対策として展開しようとし、「地球の健康のために気功が果たしうる役割を共同で探求していきたい」(津村 1993b:220) とした津村は、まさに地球が痛んだその時、気功は何ができるかを問われる事態、阪神淡路大震災を体験することとなった。

阪神淡路大震災体験によって試された「環境気功」

阪神淡路大震災で津村ら関西気功協会の活動する地域は被災地となった。神戸在住だった津村は地震直後から頻繁にその状況をレポートし、4 月には『神戸 難民日誌』として岩波ブックレットとして出版されている。(津村 1995) . 津村や関西気功協会が普及していた気功は、基本的に内気功をいう自分で行うものである。できることは、まずからだほぐしを提案し、その方法を伝えることであり、疲れを少しでも取り、リラックスすることで、だんだんにそういうシェアリングができるからだの状態になってもらうために必要最小限のやり方を示した「関西大震災被災者のための気功健康体操」を作った。(津村 1995:46-47) . しかし、被災者には身心の余裕はないと拒否する人々もいた。津村が掲げた宇宙と個人を結ぶ壮大な天人合一の思想は、阪神淡路大震災によって、等身大の身体へ、コミュニティーへと戻って来た。津村にとって震災体験は気功と気の思想を携えての社会変革、文化革命の実験であったが、それは一定の効果に留まった。津村の気功はビジョンとしては有効であっても、具体的な方策において脆弱であったことは否めない。

現代における「環境気功」の可能性

阪神淡路大震災の年、1995 年は「心のケア元年」と称された。東日本大震災を経てさらにグリーンケア、スピリチュアルケアとして広がり、様々な展開を見ている。またマインドフルネスも大注目の昨今で

ある。身心をつなぎ、さらに外なる環境ともつながる「環境気功」はその可能性を発揮しえていない。危機の時代でもある現代に、津村が提唱した内なる環境と外なる環境の調停機能としての気功を、これまでの経緯を検証し、改めて再認識することが必要ではないだろうか。

参考文献

李遠国, 2002, 『水の七つの徳』 気功文化研究所編.

前川理子, 1998, 「ニューエイジ」類似運動の出現をめぐって—1960~70 代青年の異議申し立て運動との関連で『宗教と社会』 4:79-105.

島藺進, 1996=2022 『精神世界のゆくえ—宗教からスピリチュアリティへ』 法蔵館.

津村喬, 1978, 『全共闘 解体と現在』 田畑書店.

_____. 岡島治夫, 1979, 『しなやかな心とからだ—東洋体育道入門』 新泉社.

_____, 1993a, 『NHK 趣味百科 気功専科Ⅱ』 日本放送出版協会.

_____, 1993b, 『気脈のエコロジー 天人合一と深層体育』 創元社.

_____, 1995, 『神戸 難民日誌』 岩波書店.

_____, 2015, 「気功と環境の哲学」『講座スピリチュアル学第4巻 スピリチュアリティと環境』 鎌田東二編, BNP.

_____, 2016, 『横議横行論』 航思社.



鳥飼美和子 プロフィール

人体科学会東日本ブロック理事、気功サロン世話人。上智大学大学院実践宗教学研究科死生学専攻博士前期課程修了、学位取得。NPO 法人東京自由大学元運営委員長。前衛舞踏、コンテンポラリーダンスの活動後、津村喬氏の関西気功協会に参加、現在は張明亮氏の峨眉気功を中心に活動。著書に『きれいになる気功』（ちくま文庫）、『気功エクササイズ』（成美堂）など。